

孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判

—英国主要新聞社による報道内容からの考察—

薬師寺 浩之

I. はじめに

近年までボランティアツーリズム¹⁾は、ボランティアツーリスト、援助を受けるコミュニティ、さらにこれら両者の仲介をするボランティア斡旋業者やNGO団体、旅行代理店など、それに関連する人全てに対して有益な観光活動であると称賛される傾向にあった。ボランティアツーリストは利他的で博愛的な人達であると考えられ、さらに支援を受け入れるコミュニティは、必要とされる援助を受けて心からの感謝を示すと考えられてきた。観光開発に伴う環境破壊、騒音、ごみ問題、地域資源の過剰な搾取や商品化、さらに観光者と地域住民の摩擦などがしばしば問題となり、悪名高い観光と認識されがちなマスツーリズムとは正反対の良い観光と認識されてきた²⁾。大量生産・大量消費・偽物・非持続可能性・無責任といった言葉で語られるマスツーリズムから生じる様々な弊害を克服できる観光として、1990年頃に出現した「オルタナティブ・ツーリズム」³⁾の一つとしてボランティアツーリズムはもてはやされるようになった。

しかし、2000年代頃から「オルタナティブ・ツーリズム」に対する批判が広く起こるようになった。それまで「オルタナティブ・ツーリズム」を構成するエコツーリズムやヘリテージツーリズムなどは隙間産業として認識されていたものの、それらに世間の注目が集まるにつれて大衆化・商業化が起こり、その結果観光者の悪い行動、観光地に及ぼす悪影響などの面において「マスツーリズム」との差が縮まったことが一要因とされる⁴⁾。つまり、「マスツーリズム」「オルタナティブ・ツーリズム」に関わらず、利害関係者全ての責任ある行動が観光の持続可能性に影響を及ぼすことがわかったのである。「オルタナティブ・ツーリズム」の推進は部分的な解決に過ぎず、観光地や観光産業の管理にはより厳密な科学的アプローチが欠かせないことが明白となった⁵⁾。

このように「オルタナティブ・ツーリズム」の限界が指摘され、根拠なく称賛されるようなことは無くなった。しかしながら、これを構成する一つであるボランティアツーリズムは批判の対象から外れ、潔癖で傷の無い観光と考えられてきた。このように考えられてきた背景には、ボランティアツーリズムが持続可能性、エンパワメント、途上国支援・開発、住民参加、自然環境保護、異文化間コミュニケーション、などといった決まり文句で守られていたことがある。実際、今までに多くの学術的研究がボランティアツーリズムは援助を受けるコミュニティ、さらにボランティアツーリスト双方に好影響をもたらすと擁護してきた⁶⁾。このようなボランティアツーリズムに対する擁護は、批判的検討から遠ざける要因ともなっていた。

開発途上国で行われているボランティアツーリズムの活動には、教育支援、児童（孤児）支援、高齢者・疾病者支援、自然保護活動、建設作業や施設整備など、様々なものがある。それらの中でも特に先進国からのボランティアツーリストに人気がある活動が、孤児に対する支援、つまり孤児院でのボランティア活動である。孤児院ボランティアツーリズムを扱う旅行代理店やNGO団体等は、

これを「開発途上国の現状を改善できる」観光であるとプロモーションし、さらに今までの人生観を変えることができる観光であるとも紹介する。ボランティアツーリストは、歌を歌い、絵を描き、ペンキを塗り、子供と遊び、英語を教え、さらに子供を洗う、つまり専門的な技術を必要としない活動を行う（第1図）。「模範的」な活動を通して、子供に自信を付けさせ、生活に希望を持たせることができるとボランティアツーリストは考える傾向がある⁷⁾。このような孤児院ボランティアツーリズムに対するマーケティングメッセージやツーリストの満足とは裏腹に近年、C-Rights（国際子ども人権センター）や Friends International などの児童の人権に関わる NGO 団体、ユニセフ、さらに一部の観光や国際援助に関する研究者などから孤児院ボランティアツーリズムに対する批判論が噴出してきている（第2図）。

そこで本稿では、イギリスの主要新聞社がインターネットで配信する孤児院ボランティアツーリズムに関する報道の内容の分析を通して、孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判を考察する。イギリスでは、国際支援をはじめとしたチャリティーが盛んに行われ、ボランティアツーリズムの歴史が長く、さらにボランティアツーリズムに関する批判的研究も盛んに行われている。



第1図 孤児院ボランティアツーリズムの風景

欧米系ボランティアツーリストが孤児に英語を教えている。カンボジア・シェムリアップ市の孤児院にて。2015年1月筆者撮影



第2図 Children are not Tourist Attractions 啓蒙キャンペーンのポスター
 Friends International は、孤児院ボランティアツーリズムが孤児や開発途上国社会に及ぼす悪影響について、ボランティアツーリストに知ってもらうことを目的に啓蒙キャンペーンを行っている。
 出典：Friends International ホームページ

II. 国際ボランティアツーリズムの規模

ボランティアツーリズムは、近年その規模の拡大が著しい⁸⁾。若年層の体験型旅行商品を主力商品として販売しているイギリスの大手旅行代理店 STA Travel では、アドベンチャーツアーの売り上げは前年と比較して2014年は20%減少したものの、ボランティアツーリズムは27%上昇した⁹⁾。さらに、2014年一年間で約13億ポンド（約2,262億円（2014の年間平均為替レートである1ポンド174円で計算））程度のボランティアツーリズムに関わるお金の動きが世界全体であったと推測されている¹⁰⁾。イギリスだけでも、85のボランティア斡旋組織があり、年間5万人が国外でボランティアを行っている（2015年）¹¹⁾。これらの斡旋組織の大多数は民間の旅行代理店であり、旅行商品購入者に対して高額な手数料の支払いを求める。例えば Project Abroad は、カンボジアで教育ボランティアに従事する二週間のツアーを2,215アメリカドル（約23万円）で販売する（往復の航空券とビザ取得料金を除く）。この価格は、カンボジアの教師一人に一年以上支払われる給料に相当する。旅行代金の半分以上はボランティア先に直接支払われ、プロジェクトに関する雑費となったり、長期間にわたるプロジェクトの計画やモニタリングに使われたりしていると同社は説明している¹²⁾。第IV章2節で述べる通り、ボランティアツーリズムを運営する側が要求する高額な手数料や寄付金は使途が不明瞭であることが多く、批判の対象となっている。

イギリス人ボランティアツーリストの場合、その多数を占めるのは、ギャップイヤー期間中の若年層である。ギャップイヤーとは、『親元・教員から離れた非日常下でのインターン・ボランティア・国内外留学』と定義される¹³⁾。期間は3か月から24か月であり、大学入学前・卒業後、転職間、休学利用等でギャップイヤーのタイミングがある。特に中等教育終了後から大学入学前の一年

間にギャップイヤー休暇をとる若年層が多い。ギャップイヤー中の活動には様々あり、国外留学・語学研修・インターンといった教育的要素が強いものから、アルバイト、さらに自分探しの旅（バックパッキング）・遊学・放浪・ヒッチハイキングといった余暇的な要素が強いものまである。毎年、約16万人もの18歳のイギリス人が中等教育終了後、大学入学もしくは就職前に一年間の休暇（ギャップイヤー）を取る¹⁴⁾。そのうち、約24,000人がギャップイヤー期間中に余暇的な要素が強い自分探しの旅（バックパッキング）に出かけると推測される（2013年）¹⁵⁾。ギャップイヤー期間中に旅に出るバックパッカーツーリストの活動として特に人気があるのは、開発途上国でのボランティア活動である。支援を必要とする開発途上国の現状を目の当たりにすることによって、今までの自分を省察したり自分探しをしたりという通過儀礼的な意味合いがそこにはある。第IV章6節で詳しく考察する通り、このギャップイヤー期間中のボランティアツーリストが、孤児院ボランティアツーリズムに関する批判的議論の矢面に立つことが多々ある。

Ⅲ. イギリス主要新聞社による孤児院ボランティアツーリズムに関する報道

孤児院ボランティアツーリズムに関する記事の収集には、Google 検索エンジンを使用した。検索キーワードは、「orphanage volunteer tourism」、及び「orphanage voluntourism」（どちらも孤児院ボランティアツーリズムの意味）である。2016年9月24日と25日に検索し、38記事収集することができた。掲載新聞の内訳は、*The Guardian* が14記事、*The Daily Telegraph* が9記事、*The Independent* が8記事、*The Daily Mail* が7記事である¹⁶⁾。記事配信年では、2016年（1月～9月）7記事、2015年10記事、2014年6記事、2013年6記事、2012年1記事、2011年と2010年がそれぞれ4記事である。

各記事のタイトル（第1表）を見ると、大多数が先進国からの観光者が開発途上国の孤児院でボランティアを行うことに対して、批判的に捉えていることが理解できる。中には、孤児院ボランティアツーリズムは、支援の受け手である孤児に対して有害無益（do more harm than good）であり、この活動は行うべきではないという比較的強い口調での批判的なタイトルも多く見られる。一方で、孤児院ボランティアツーリズムを擁護する記事は少数である。“Student Speak: Volunteer holidays can be a powerful tool for development”（学生の声：ボランティア休暇は開発途上国開発の強力な手段となる）（2015年4月30日、*The Guardian*）、や“Voluntourism: Helping hands on holiday”（ボランティアツーリズム：旅行中に援助ができる）（2011年5月4日、*The Independent*）などに限られる。その他には、孤児院ボランティアツーリズムの問題点を踏まえたうえで、ボランティアツーリストとして、注意を払うべき点について掲載した記事も複数みられる。“Gap year volunteering: how to do it right”（ギャップイヤー中のボランティア：どのようにしたら正しいボランティアができるのか）（2015年8月13日、*The Guardian*）や、“15 ways to make your mark as a volunteer”（あなたをボランティア活動家として際立たせる15の方法）（2014年7月25日、*The Guardian*）などである。悪質なボランティア斡旋業者の見破り方、ボランティア中の心得やホームシック・カルチャーショック・ライフショック¹⁷⁾への対応方法などが記載されている。

第1表 英国主要新聞社がインターネットで配信した孤児院ボランティアツーリズムに関する記事のタイトル

新聞名・配信年月日	記事タイトル
The Independent 2016.8.23	JK Rowling condemns 'voluntourism' and highlights dangers of volunteering in orphanages overseas (JK ローリングはボランティアツーリズムを非難し、国外の孤児院でボランティアをすることの危険性を訴えている)
The Telegraph 2016.7.19	In defence of the gap year – just don't make it a 'gap yah' (ギャップイヤーを弁護するために – ギャップイヤー旅行者はギャップイヤーを 'gap yah' ⁱ⁾ にはするな)
The Independent 2016.7.8	A message for Louise Linton and anyone considering voluntourism: nobody needs your neo-colonialist 'aid' (ルイズ・リントン ⁱⁱ⁾ とボランティアツーリズムを考えている人へ：誰もあなたの新植民地主義的な「援助」は必要としていない)
The Guardian 2016.5.16	Volunteers are fueling the growth of orphanages in Uganda. They need to stop (ボランティア活動はウガンダの孤児の数を増加させる要因となっている。ボランティア活動は中止される必要がある)
The Guardian 2016.4.13	Gap Year for grown ups: older volunteers offer great opportunities for charities (成人のギャップイヤー：大人のボランティアはチャリティにとっては好都合である)
The Guardian 2016.1.13	Teaching abroad: 'Volunteers had little educational benefits to the kids' (国外で教えること：ボランティアは子供にほとんど教育的な利益はもたらさない)
The Guardian 2016.1.13	Volunteer travel: expert raise concerns over unregulated industry (ボランティアトラベル：専門家は未制御の産業であることを心配している)
The Guardian 2015.8.15	Gap-year Britons opt to boost their CVs in English-speaking countries (ギャップイヤーのイギリス人は英語圏の国々で仕事を探そう傾向がある)
The Independent 2015.8.14	Voluntourism: Why students should put their gap year or summer to use before university (なぜ大学入学前の夏かギャップイヤー期間中にボランティアツーリズムを経験すべきなのか)
The Guardian 2015.8.13	Gap year volunteering: how to do it right (ギャップイヤー中のボランティア：どのようにしたら正しいボランティアができるのか)
The Guardian 2015.6.2	Seven questions you should ask before you volunteer abroad (国外でボランティアをする前に自問自答すべき7つの質問)
The Guardian 2015.5.21	Does voluntourism do more harm than good? (ボランティアツーリズムは有害無益であるのか?)
The Guardian 2015.4.30	Student Speak: Volunteer holidays can be a powerful tool for development (学生の声：ボランティア休暇は開発途上国開発の強力な手段となる)
The Guardian 2015.4.9	Student Speak: Can volunteer holidays be a force for good? (学生の声：ボランティア休暇は支援を受け入れている側に有益なものとなっているのか?)
Daily Mail 2015.3.25	Fake orphanages. Bogus animal sanctuaries. And crooks growing rich on Western gullibility... who do-gooding gap year holidays may be a horrifying callous con (偽の孤児院、偽の動物保護区域、そして詐欺師は騙されやすい欧米人を利用して金持ちになる ... なぜ良識のある観光者が行うギャップイヤー休暇にはぞっとさせられるような無情な反対論があるのか)
The Guardian 2015.3.19	Volunteering overseas: the best method for creating new aid workers? (国外でのボランティア活動：新たな援助隊員の創出に最適な方法なのか?)

The Guardian 2015.3.19	Gap yah volunteers not all bad, says new report (最新のレポートによると、ギャップイヤーボランティアの全てが悪いというわけではない)
Daily Mail 2014.11.24	Adventures in voluntourism: Can five days helping at a school in a South African township really make a difference? (ボランティアツーリズムという冒険：5日間南アフリカ黒人居住区の学校でボランティアをするだけで本当に現地の状況が改善されるのであろうか?)
The Independent 2014.10.25	Voluntourism is a 'waste of time and money' – and gappers are better off working in Britain (ボランティアツーリズムは時間と金の無駄である – ギャップイヤー期間中のイギリス人は国内で働いた方が良い)
The Guardian 2014.9.10	How can NGOs meet the challenges of ethical spending? (NGO 団体はどのようにして倫理的なボランティアツーリズムを推進していくべきか?)
The Telegraph 2014.8.14	Gap years: Voluntourism – who are you helping? (ギャップイヤー：ボランティアツーリズム—いったい誰を助けることになるのか?)
The Guardian 2014.7.25	15 ways to make your mark as a volunteer (あなたをボランティア活動家として際立たせる 15 の方法)
The Telegraph 2014.2.11	Expensive voluntourism trip 'the least responsible' (値段が高いボランティアツーリズムパッケージ商品は無責任)
The Independent 2013.12.31	Want an earnest answer to 'voluntourism'? The International Citizen Service may be for you (International Citizen Service ⁱⁱⁱ) がボランティアツーリズムに関する質問に真面目に答えます)
The Telegraph 2013.9.23	Cambodia 'best value' for backpackers (カンボジアはバックパッカー観光者にとって最高に価値のある場所である)
The Telegraph 2013.8.15	How voluntourism changed my life (ボランティアツーリズムは自分の人生をどのように変えたのか)
The Telegraph 2013.7.30	Orphanage volunteering 'part of the problem' (孤児院ボランティアは問題の一部である)
The Telegraph 2013.7.27	Goodbye 'Gap yah', hello good works (さようなら 'Gap yah'、こんにちは良質なボランティア労働)
The Independent 2013.1.12	Brangelinas need not apply: A Cambodian orphanage is leading to march against 'voluntourism' (ブランジェリーナ ^{iv}) は申し込む必要はありません：カンボジアの孤児院はボランティアツーリズムの流行に反して苦境に立たされている)
The Telegraph 2012.2.3	Orphanage tourism: help or hindrance? (孤児院観光：援助かそれとも妨害か?)
Daily Mail 2011.5.25	Build a school, help orphans or care for chimpanzees: volunteering breaks have never been so rewarding (学校の建設、孤児の援助、またはチンパンジーの世話をする：ボランティア休暇は非常にやりがいのあるものである)
The Independent 2011.5.4	Voluntourism: Helping hands on holiday (ボランティアツーリズム：旅行中に援助ができる)
Daily Mail 2011.4.11	The scandal of orphanages in tourist resort and disaster zones that rent children to fleece gullible Westerners (リゾート地や災害発生地域の孤児院のスキャンダル。子供を借り出し騙されやすい欧米人を騙し取る)
The Independent 2011.3.25	Cambodia's orphanages target the wallets of well-meaning tourists (カンボジアの孤児院は善意のある観光者の財布を狙っている)

The Telegraph 2010.11.3	Volunteer holidays 'do more harm than good' (ボランティア休暇は有害無益である)
Daily Mail 2010.11.3	Gap year volunteers 'do more harm than good' in third world countries (ギャップイヤー旅行中のボランティアは、第三世界の国々にとって有害無益である)
Daily Mail 2010.8.22	Gap year holidays: From backpacking to teaching English abroad (ギャップイヤー休暇：バックパッキングから国外で英語を教えることまで)
Daily Mail 2010.8.19	Volunteering for some lessons in life on a teaching course in Cambodia (カンボジアでの英語教師ボランティア経験を通して感じた、人生の戒めとしてのボランティア)

注

- i) “Gap Yeh”とは2010年からYoutubeで公開されている、ギャップイヤー期間中のバックパッカーツアーリストを題材にしたイギリスのスケッチコメディ動画である。ボーディングスクールを卒業した上流階級の若者が、バックパッカー旅行中に開発途上地域で行う新植民地主義的な言動・行動をあざ笑う。開発途上国でのボランティア活動を雑に行う一方で、パーティに情熱を注ぐ姿が映し出されている。
- ii) ルーズ・リントン (Louise Linton) は、英国スコットランド出身の女優。彼女が高校卒業後にアフリカ・コンゴで行ったボランティア活動の回想録 (“In Congo’s Shadow: One girl’s perilous journey to the heart of Africa” (『コンゴの影で：ある少女のアフリカ奥地への危険な旅』) (2016年4月発刊) がアフリカの苦境を救うのは白人であるという新植民地主義的なスタンスで執筆され、事実誤認で偏見を助長する恐れがあるとして、アフリカ各国のネット社会を中心に批判が噴出している。
- iii) International Citizen Service は、英国政府主導で進められている開発途上国での開発プロジェクトに参加するボランティアを斡旋する組織。
- iv) ブランジェリーナ (Brangelinas) とは、米国の俳優ブラッド・ピットと女優アンジェリーナ・ジョリー夫婦のことを指す造語。アンジェリーナ・ジョリーは開発途上国で慈善活動を行うと共に、カンボジア人・ベトナム人・エチオピア人の子供と養子縁組をしている。彼女の活動・行動は世界中で話題となると同時に開発途上国の貧困イメージを強化することにもなり、多くの人にとってボランティアツーリズムを行うきっかけとなった。

IV. 孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判

1. ボランティアの概念をめぐる矛盾

そもそも、ボランティアとは自発性、無償性、利他性、先駆性があることが原則であり、自己を犠牲にしても他者に貢献することを含意するものである¹⁸⁾。しかしながら、ボランティアツーリズムにおけるボランティア活動は、ボランティアを斡旋・提供する旅行代理店やボランティア斡旋団体の側面から考えても、またボランティアを行うボランティアツーリストの側面から考えても、本来的なボランティアの意味合いからはかけ離れている。

ボランティアを斡旋・提供する旅行代理店やボランティア斡旋団体の側面から考えると、ボランティアツーリズムはあくまでも経済活動と捉えられ、ビジネスとして利益を追求することが求められる。このことは、ボランティアの原則の一つである無償性に反している。さらに孤児院ボランティアツーリズムにおいては、孤児という社会の中でも立場が弱い状態に置かれた子供を利用してビジネスを行っている点において、批判が噴出している。次節で詳しく述べるが、一部の孤児院の運営者、ボランティア斡旋団体や旅行代理店などは、高額の手数料を観光者から徴収し、本来なら孤児の生活に使うべきお金を転用して私腹を肥やしたり、孤児に無理やりみすばらしい格好をさせて観光者を引き付け多額の寄付金を募ったりしている。つまり、倫理的な問題が見られる。

ボランティアツーリストは孤児に対する支援という博愛的・利他的な動機を主張する傾向にある

が、実際に孤児院でのボランティアツーリズムの活動後に得られる満足感や自己高揚感は利己的なものである。ボランティアツーリストに限らず観光者は、観光に参加すればこの先何かいいこと(「快」)があるかもしれないという期待に基づいて旅行を実行する¹⁹⁾。このような報酬は、日常生活の欠陥ないし圧力と緊張の埋め合わせとなることが多い。ボランティアツーリストが求める「快」の成分は、ボランティア活動を通して自分自身を理解する(自分探し)、感動的な経験を、運命的な出会いをする、といったものの他に、支援対象者の不の現実へのまなざしを通して得られる自分の運命への優越感、といったものもあり得る²⁰⁾。前述の通り、そもそもボランティアとは利他的である事が原則であり、ボランティアツーリストが何かしらの「快」を求めてボランティア活動に従事することには矛盾がある。

ボランティアツーリズムを実行しようとする人は、まず初めに単にいつもとは違う休暇をしたい、つまり観光化されていないところで地元住民と一緒に時間を共有し、自己成長や自己満足などの「快」を得たいのか、それとも開発プロジェクトに真剣に取り組みたいと思っているのか、しっかりと考える必要があると Pomham²¹⁾ は主張している。後者の場合は、もはやボランティアツーリズムの定義である、旅行中に観光者として何かしらのボランティアを行う、というレベルではないであろう。一方で前者の場合、ボランティアツーリストは本来的であれば無償性・利他性等が前提にある「ボランティア」の真似事をして、「快」を得た気分になっているに過ぎない、と批判的に捉えることができる。

2. ボランティアツーリズムの企画・運営者のモラルに対する批判

孤児院ボランティアツーリズムが欧米系若年層を中心に人気となるにつれて、ボランティア斡旋手数料や寄付金を目当てとした旅行代理店や NGO 団体等が現れるようになった²²⁾。そもそもボランティアの機会を観光者に提供するの、ほとんどの場合旅行代理店である。旅行代理店は、チャリティーというよりはボランティアの需要を満たし利益を追求するためにボランティアツーリズムに着手している傾向がある²³⁾。利益追求を重視するボランティアツーリズムの運営者は、児童保護の側面をないがしろにする傾向があり、ボランティアツーリズムが本末転倒の状態に陥っている²⁴⁾。ボランティアツーリズムの企画・運営者の行き過ぎた利益追求が引き起こすモラルの問題に対して、以下の3点の批判が配信記事に見られた。

一点目の批判は、ボランティアツーリストや国内外の支援者から集められた寄付金やボランティア仲介手数料の使途が、非常に不透明であることである。開発途上国の孤児院の多くが、国外のドナーの寄付金で運営されている²⁵⁾。集められた寄付金は、子供のために使われるのは事実であるが、大部分は寄付を募った人の懐に入ってしまうのが現状である²⁶⁾。ユニセフの推測によると、孤児院の寄付金全体のうち子供の福祉に使われるのは3分の1以下である²⁷⁾。カンボジアのある孤児院では、すべてのボランティアツーリストはボランティア仲介手数料と強制的に徴収される寄付金として一週間当たり200ポンド(約25,000円)支払っているにもかかわらず、夕食では29人の子供が一つのチキンを食べている、という現実がある²⁸⁾。さらに、最悪な孤児院の運営者であったら、孤児院の生活環境は向上させないものの、自分は巨大な家に住み、自分の子供には国外留学をさせている。その資金は寄付金、もしくは寄付された物資の転売で賄われている。このように、自分の懐に入る利益を最大化するため、孤児への食糧・健康や教育に関する経費は最小限化させてビジネスを行っている者も多かれ少なかれ存在する²⁹⁾。ボランティアツーリストは、このような寄付金や手数料の

用途があまりにも不明な孤児院でのボランティアは避けるべきである。Batton³⁰⁾は、ボランティア斡旋団体が孤児に関わる諸問題に関心を払っているか、もしくはボランティアの手数を目当てにしているかを理解するためには、過去のボランティア活動で達成したことに関する証拠を見せてもらえば良い、と説明している。本当に諸問題に関心を払っている団体であったら、達成したことに関する詳細を説明できるはずである。

二点目の批判は、ボランティアツアーリストからのより多くの寄付金を集めるため、孤児院の運営者が無理やり孤児にみすぼらしい格好をさせ、貧困を演じさせていることである。そうすることによって、見る人は自分がお金を寄付しなければいけないと思ってしまう³¹⁾。カンボジアのある孤児院では、孤児がとてもやせ細っていたので、ボランティアツアーリストが経営者に「寄付金が不足しているのか」と尋ねたところ、「寄付金はたくさんある。子供がやせ細ったままであると支援団体がより多くの寄付金を送ってくれる」と返信があった³²⁾。さらに、カンボジアの観光都市・シェムリアップ市では夜中、旅行者が飲食やパーティをしているところに孤児が「私たちを助けてください」と書いたプラカードを持ってパレードを行い、音楽を演奏し、チラシを配り、観光者に孤児院を訪問するように勧める、という光景が過去に見られた。旅行者は小さなパフォーマーに拍手をし、横にいる大人（孤児院の運営者又は従事者）に20ドルを渡し、近日中に孤児院を訪問することを約束した³³⁾。

三点目の批判は、本来なら現地住民が担うはずの労働をボランティアツアーリストが無償で行ってしまうため、現地住民の雇用が危険に晒されていることである。ボランティアツーリズムの企画・運営者にとっては、ボランティア活動を通して自己成長の手段を欲している欧米系若年層の欲求に応えることは、利益に直結する。さらに、ボランティアが無償で労働に従事することは人件費の削減にもつながる³⁴⁾。専門的技術が必要とされる長期間のボランティアプロジェクトとは違い、短期間のボランティアは日常のスキルを駆使することでできることが多い。例えば、子供に本を読み聞かせるためのスキルや、日曜大工のスキルなどである³⁵⁾。開発途上国では非熟達労働者の雇用が過剰にあるため、欧米系若年層がボランティア活動に従事することは、現地住民の仕事を奪うことになる。

上記の批判点をまとめると、ボランティアツーリズムにおける斡旋手数料や寄付金などは、大抵の場合子供の利益にはならない、と推測される。それは旅行代理店や孤児院運営者の懐に入る。それなので、子供の貧困状態はほとんど解決されず、「不幸な孤児」は孤児院を訪れる観光者を引き付け、更なる大人の利益の拡大へとつながっていくという循環が確立されている。この事実は、孤児院ボランティアツーリズムの企画・運営者のモラルによるところが大きい。

3. 孤児院の増加に伴う、親の安易な育児放棄や子育てに対する意識の低下

カンボジア、スリランカ、ガーナといった開発途上国では、貧困率の減少、衛生状態や社会福祉の向上などが貢献して孤児の数は減ってきている。それにも関わらず、孤児院の数は増えている³⁶⁾。孤児院ボランティアツーリズムの人気にあやかって、孤児院観光ビジネスをする人が増えたことが一因である。

カンボジアでは2006年から2011年の5年間、孤児院の数が153施設から269施設に激増している。21施設のみが政府によって運営され、それ以外は個人的に運営されている。特に、宗教と関連した施設が多い³⁷⁾。シェムリアップ市では、人口10万人の都市に孤児院が35施設程ある。そのほ

とんどは、過去10年程の間に設立され、ボランティアツーリストの受け入れに積極的である³⁸⁾。インドネシア・バリ島では孤児院の数が20年間で二倍に増えた³⁹⁾。

本来、孤児院とは親を失い、保護者のない乳幼児や少年を収容して、扶養や教育を施す社会事業の施設を指す。つまり、両親ともに亡くなっている子供を収容する施設である。世界的な傾向として、以前の孤児院は両親が亡くなり身寄りのない子供を収容していた。近年では、全世界の孤児院にいる子供（約800万人）のうち、少なくとも80%は片親もしくは両親が生存している⁴⁰⁾。彼らが孤児院にいる理由は、貧困・差別・身体や精神の障害、さらに民族的な問題などがある。親が本当に子供を育てられない何らかの事情があり、孤児院に子供が預けられているケースも多くある。一方で、孤児院の増加に伴い親が安易に子供を孤児院に預けてしまう問題が浮上している。つまり、親の安易な育児放棄や子育てに対する意識の低下（子供を家族から切り離すことに対する罪悪感の低下）などが、ボランティアツーリズムの人気の引き金となって起こっている⁴¹⁾。

さらに、ボランティアツーリストを受け入れている孤児院の運営者の一部は、「孤児」集めのため貧困家庭を巡り、子供を手放して孤児院に預けることを勧める。多くの親は、たとえ貧困状態にあり子育てが十分にできなかったとしても子供を手放すことをためらうが、最終的には子供の将来を思い子供と別れることを決意する⁴²⁾。孤児院のホームページを見ると、幸せそうな子供の写真が掲載されていることが多い。実際に孤児院を訪れ中に入ると、訪問者は笑顔で迎えられ、孤児の過去の話が聞かされる。しかし、孤児は実際のところ人身売買されていたり、親から一時的に貸し出されていたりしていることも多い⁴³⁾。

孤児院ボランティアツーリズムの人気の高まりは、本来なら必要のないはずの親子の別居を促進させたり、弱い立場の子供を利用した制度化や商品化につながったりしているのである（第3図）。

4. 孤児院ボランティアツーリズムがもたらす孤児に対する安全の脅威

孤児院とは、本来は身寄りのない子供が安全に生活に必要な衣食住や教育を受けられる場所であるはずであるが、ボランティアツーリストを積極的に受け入れる孤児院は、むしろ子供の安全を脅かしている⁴⁴⁾。つまり孤児院でのボランティアは、多くのボランティアツーリストの動機である孤児を助けたい、という良識的な動機とは裏腹に、貧困にあえぐ世界中の子供たちにとって貧困の解決から遠ざける要因となっている。

児童福祉支援に関する問題でしばしば議論となることは、貧困状態に置かれた子供は、たとえ子供を養育するための十分な資金が親に無くても、親と一緒に生活するのが良いのか、それとも設備が整い資金のある施設に預けられるのが良いのか、ということである。この議論に対して多くの調査は、子供は施設に預けられるよりも、家族やコミュニティの下で育てる方がより良いことを明らかにしている。その理由として挙げられるのは、孤児院を卒業した青年は、家族との関係が崩壊状態に陥ったり、ホームレスになったりするほか、人身売買や薬物の使用などといった問題を多く抱える傾向があることである⁴⁵⁾。このような現状から、多くの先進国では児童福祉施設や孤児院を解体する動きが見られ、その代わりコミュニティ内での子供のサポートプログラムや子育て支援プログラムを強化する動きがある。孤児院もしくは児童福祉施設は、最後の砦であるべきである。

前節で述べた通り、近年開発途上国ではボランティアツーリズムの人気の要因となって孤児院の数が増加する傾向にあるが、これは先進国諸国での孤児院廃止の動きとは矛盾する。子供を家族から離して施設で育てると貧困層の子供の貧困問題の解決につながるという考えは、短期的な好影響



第3図 Don't Create More Orphans 啓蒙キャンペーンのポスター

Friends International は、Children are not Tourist Attractions 啓蒙キャンペーン（第2図）内でボランティアツーリストが孤児院でボランティアを行ったり寄付をしたりしても、孤児のためにはならないことを訴えている。

出典：Friends International ホームページ

しか考慮していない。つまり、孤児院は親子が離れ離れになった原因を解決しようとはしない。孤児院が子供に対して無料の教育・食事・衣服を与えることで、親が安易に子供を切り離してしまう⁴⁶⁾。子供の一生や家族の長期的な側面を考えると、これは最良のやり方ではないのは明らかである。たとえボランティアツーリストが博愛的で利他的な動機で孤児院を訪問したとしても、その訪問が子供と親を離れ離れにさせてしまう要因を生み出しているのである⁴⁷⁾。

さらに前節で述べた通り、ボランティアツーリズムを受け入れる孤児院の運営者の中には、寄付金を集めて私腹を肥やすという、悪徳な人も存在する。さらに、ボランティアツーリストを積極的に受け入れる支援プロジェクトにおいては、ボランティアが行う無償の労働力の程度、さらにボランティアが支払う斡旋手数料や寄付金の程度次第でプロジェクトの進行具合が変わってくる。こういった背景があり、先進国諸国では当然のように行われている犯罪履歴や身元調査、さらにボランティア活動に関連する資格取得の確認を行わず、所定の斡旋手数料や寄付金を払えば誰でも簡単に孤児に対するボランティアが行えるシステムとなっている。このことは、孤児に対する支援の質の低下をもたらす⁴⁸⁾だけでなく、小児性愛者や人身売買を目論んだ者までもが容易に孤児に接することを可能にし、孤児の安全の脅威となる。

真剣に取り組んでいる孤児院でのボランティアを斡旋する団体であったら、犯罪履歴やボランティア活動に関連する資格取得の確認をするはずである。これら無しでは、イギリスをはじめ先進

国諸国では孤児院でボランティアをすることはできない⁴⁹⁾。それにも関わらず、なぜ国外（開発途上国）でボランティアをする時にはこれらのチェックが無く、さらにボランティアツーリストはチェックが無いこと自体に批判的にならないのであろうか。

少数ではあるが、孤児院の中には子供の労働、性的虐待や人身売買を行っているところもある。実際、カンボジアでは2011年前半にはシムリアップで孤児院を運営するイギリス人が子供に暴行を加えたとして逮捕されているし、毎年のように小児買春、人身売買等を行った孤児院の運営者が逮捕されている。

5. 孤児院ボランティアツーリズムがもたらす孤児の感情の形成に対する悪影響

ボランティアツーリズムの活動は、半日から二週間程度の短期間のものが多い。この短期間のボランティアは、コミュニティにダメージを与える可能性が大きいとの指摘がある。支援の受け手のコミュニティと融和できるようになるためには最低三ヶ月程かかり、それより短いボランティアであると有効な仕事は提供できない可能性があるとの指摘がある⁵⁰⁾。

孤児院ボランティアツーリズムでは、一人当たりのボランティア期間の短さは孤児の感情の形成に悪影響を及ぼす⁵¹⁾。二週間ごとにボランティアが入れ替わる孤児院であったら、孤児がボランティアツーリストを信頼し、感情的な繋がりが芽生えた頃、ツーリストは突然孤児院を去ってしまう。親しくなれた大人が突然居なくなってしまうことで、子供は自分が見捨てられたと感じてしまう。ボランティアは、子供と接することは子供の発育にとって良いと考える傾向があるが、実際は子供に対して害となるものでもある。

6. ボランティアツーリストの利己的動機に対する矛盾と言行動に対する批判

概念上はボランティアとは支援者の博愛的精神で動機付けられ、他者を利他的精神で援助し、自己中心性は見られないものである⁵²⁾。しかしながら、欧米諸国からの若年層ボランティアツーリストは自分探しや自己成長という利己的動機で、また通過儀礼的にボランティアを行う傾向が強い⁵³⁾。

開発途上国でボランティア活動を行う欧米諸国からの若年層のツーリストに対しては、皮肉めいた記事が散見された。例えば、Utton⁵⁴⁾は、「ミドルクラスの若年層は、世界の貧困や困窮の軽減に使命感を抱いてボランティアに従事する。わずか数週間の渡航に巨額で馬鹿げた額を支払い、孤児を抱きしめ、サファリに行って写真を撮り、神聖ぶった態度でニヤッと笑うというのが、ステレオタイプなイメージである。」と述べている。さらに Kweifio-Okai⁵⁵⁾は、「ギャップイヤー期間中の若者は、ギャップイヤー兵士として世界をより良くしようと博愛的動機に基づいてボランティア活動に従事しているつもりである。しかしながら、彼らの装備品は貧弱で（基本的な労働も十分にできない、つまりボランティア能力が無いこと）、しばしば冷笑的となる。」⁵⁶⁾と述べている。

ボランティアツーリストは基本的な労働すら十分にできないようであれば、ボランティアツーリズムは本来のボランティア活動の趣旨とは逸脱していることになる。孤児院にとっては、欧米人から寄付を募り、その寄付金で地元の人を労働者として雇った方が効率的ではなからうか。

ボランティアツーリストの間で強調されやすいことは、自分自身の活動が被援助者にもたらす貢献の程度ではなく、自分自身の自己満足感や優越感である。短期間のボランティアツーリストは、放置され、虐待を受け、また親から手放された子供と「親しげな関係」を作ることを奨励される。この「親しげな関係」が終了する、つまりボランティアツーリストが孤児院を去る時、彼らは自分自

身が不遇な環境に置かれた子供に対して貢献ができたと自信を持ち、貧乏な子供が自分を頼ってくる姿に満足感を得て特別な気持ちになる傾向がある⁵⁷⁾。あるボランティアは「孤児院の子供は自分の人生を完全に変えた。今自分は全く違う人になった。14日間の孤児院の滞在で、多くのことを学んだ。孤児の状況を大きく改善できたし、孤児と一緒に時間を過ごせたことは本当に満足感が得られた。これは今までの人生において最も本物の経験であったと言える。」と語る⁵⁸⁾。このように、ボランティアツーリズムにはツーリストに「何か心地良い要素」(feel good factor)を感じ取らせるものがあり、これがボランティアツーリズムの人気の背後にあるのは事実である。一方で、これはボランティアツーリストに対してボランティアツーリズムの負の側面を啓蒙しようとしても、聞き入れてもらえない要因ともなり得る⁵⁹⁾。さらに前節で述べた通り、孤児にとっては「親しげな関係」を築けたボランティアが突然去ってしまうことで放棄されたと思ひ込んでしまい、それが感情や社会性の構築の障害となる可能性もある⁶⁰⁾。

さらに、ボランティアツーリストの孤児に対する言動や行動に対する批判もある。Lambert⁶¹⁾は、ボランティアツーリズムの大きな問題点は、裕福なギャップイヤーツーリストがこれを休暇の一つと考えている点であると主張する。彼らはボランティア活動に深く入り込むことは無く、ボランティアツーリズムであっても、単に少しの楽しみを求めているに過ぎないのである。その他にも、以下のようなボランティアツーリストによる行動を問題視する記事も見られた。一点目は、ボランティアはしばしば孤児院の子供に対して過去の不幸な出来事について興味本位で尋ねることがある、ということである。これは子供に過去のトラウマを思い出させるものとなり、感情の発達に大きな悪影響を与える。二点目は、ボランティアは孤児と一緒に写真を撮りたがり、写真の一部はFacebookや個人のブログに掲載されることである⁶²⁾。普段友達の写真が無許可でSNSにアップロードすることは躊躇するにも関わらず、孤児の写真に対してはこの躊躇が見られない。孤児院に在籍する子供の写真をインターネット上に載せることは、小児買春や人身売買を行う者の目に留まると孤児の身に危険が迫る可能性が大いにある。

V. おわりに

本稿はイギリスの主要新聞社がインターネットで配信する孤児院ボランティアツーリズムに関する報道の内容の分析を通して、孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判を考察した。孤児院ボランティアツーリズムを擁護する記事よりも、批判的に論じた新聞記事の方が圧倒的に多かった。孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾や批判は、以下の二点に集約された。

一点目は、そもそも孤児院ボランティアツーリズムには、その概念に矛盾が見られることである。具体的に言うと、ボランティアとは無償性や利他性が前提条件にあるものの、ボランティアツーリストには自分探し・自己成長といった利己的な動機が前提にあり、矛盾が見られる。さらに、ボランティアツーリズムの企画・運営者の中には、ボランティア活動を通じた要支援者(孤児)へ貢献するために活動をするのではなく、ツーリストからのボランティア斡旋手数料や寄付金を集め、私腹を肥やすという利己的な側面を強調する人も多かれ少なかれ存在する。

二点目は、このようにボランティアツーリズムの企画・運営者が、これをビジネスとして行っていることが引き金となり、支援を受ける孤児に様々な悪影響が及ぼされることである。例えば、手

数料や寄付金目当てであるため、ボランティアを行う人がどのような人であるのか、つまり過去の犯罪やボランティアを行うための技能は問われない傾向がある。このことは、ボランティア活動が非効率に行われる結果になったり、孤児が人身売買や小児買春といった危険に晒されたりする可能性を高める。さらに、孤児の数は世界的に減少傾向にあるにもかかわらず、ボランティアツーリズムの人気に乗じてビジネスとして施設を開設する者が増え、開発途上国における孤児院の施設数は増加傾向にある。このことは、本来なら施設に入れる必要がない子供を安易に預けてしまう親が増える要因となり、親の安易な育児放棄や子育てに対する意識の低下といった批判につながる。また、孤児院ボランティアツーリズムはほとんどが短期間の活動であるため、ボランティアと孤児との間の信頼関係が築かれ始めた頃に別れとなってしまふ。このことは、孤児の感情の形成に悪影響を及ぼす。

このような矛盾や批判から言えることは、ボランティアツーリズムとは、本来的なボランティアの意味である要支援者に対して博愛的・利他的な精神をもって無償で援助すること、とはとても言い難い。むしろ観光ビジネスの一形態として、ボランティアツーリズムの企画・運営者が効率的に利益を追求できるシステムが確立されている。さらに、ボランティアツーリズムは決して支援を必要としている人に対して有益に働いているとは考えにくく、それは国際援助の真似事を行う観光活動の一つと捉えた方が理解しやすいかもしれない。ボランティアツーリズムは、観光者にまなごしを向けられる対象が貧困や不幸といった負の現実と直面した人であり、いわゆる観光資源である。このような社会的に不利な立場に陥っている人を利用して金儲けをしようとする旅行代理店やボランティア斡旋団体、さらにこのような人に対してボランティア活動を行い自己成長や自分探し、さらに高揚感を得ようとするボランティアツーリストが批判の対象となってしまうのは容易に想像できる。利他性が伴うボランティア活動を、利己性が主張されやすい観光活動として行うボランティアツーリズムには、大きな矛盾が伴っているのである。

注

- 1) 大橋によると、ボランティアツーリズムとはあくまでも観光者である者が、旅行中に観光者として何かしらのボランティア活動に従事することである。よって、ボランティアツーリストに従事するボランティア活動の内容や期間、技術的力量的の程度は問われない。大橋昭一「ボランティア・ツーリズム論の現状と動向－ツーリズムの新しい動向の考察－」『観光学』6、2012、9-20頁。
- 2) Guttentag, D.: Volunteer Tourism: As Good as it Seems? in Singh, T. V. (ed.): *Critical Debates in Tourism*, Channel View Publications, 2012, pp.152-159.
- 3) 「オルタナティブ・ツーリズム」(「もう一つの観光」、もしくは「新しい観光」とも呼ばれる)とは、1960年代以降発達した大量生産・大量消費型で大衆向けのマストツーリズムの弊害(自然環境破壊・観光開発に伴う地元住民の疎外化など)を克服できると考えられてきたタイプの観光を指したものである。これには、エコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘリテージツーリズム、ボランティアツーリズムなどが含まれる。これらの観光に共通している特徴は、マストツーリズムとは違い個人旅行型で小規模であるため大規模な観光開発を必要としない、さらに教養を深め「本物」を追い求めることが観光者の主要な旅行動機であることが多く、良識のある観光者が多いため観光地への負担が小さい、ということである。よって「オルタナティブ・ツーリズム」は持続可能な観光に結び付くと称賛されてきたのである。
- 4) 薬師寺浩之「持続可能な観光開発に関する一考察－倫理的概念適応の重要性とその限界－」『日本観光研究学会第26回全国大会論文集』2011、429-432頁。
- 5) このような経緯があり、2000年前後から全世界の傾向として観光研究への資金が増え、観光に関する学術誌も急増した。さらに、観光教育を提供する大学の数も増えた。持続可能な観光開発の概念も、持続可

能な開発の概念を軸としてこの頃発展した。

- 6) ボランティアツーリズムを擁護する論文は、以下の論文がある。① Wearing, S.: *Volunteer Tourism: Experiences that Make a Difference*, CABI Publishing, 2001. ② Singh, S and Singh, T. V. Volunteer Tourism: New pilgrimages to the Himalayas. in Singh, T. V. (ed.) *New Horizons in Tourism: Strange Experiences and Stranger Practices*, CABI Publishing, pp181-194. ③ McGehee, N and Santos, C. Social change, discourse and volunteer tourism. *Annals of Tourism Research*, 32 (3), pp760-779. ④ Wearing, S., Deville, A. and Lyons, K. The volunteer's journey through leisure into the self. in Lyon, K. and Wearing, S. (eds.) *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, CABI Publishing, pp63-71.
- 7) Pitrelli, M.: Orphanage tourism: help of hindrance? <http://www.telegraph.co.uk/expat/expatlife/9055213/Orphanage-tourism-help-or-hindrance.html> (*The Telegraph* 配信、2012年2月3日、2014年10月25日、2016年9月25日閲覧)
- 8) Brown, J.: Voluntourism is a 'waste of time and money' – and gappers are better off working in Britain. <http://www.independent.co.uk/travel/news-and-advice/voluntourism-is-a-waste-of-time-and-money-and-gappers-are-better-off-working-in-britain-9816837.html> (*The Independent* 配信、2014年10月25日、2016年9月24日閲覧)
- 9) McVeigh, T.: Gap-year Britons opt to boost their CVs in English-speaking countries. <https://www.theguardian.com/education/2015/aug/15/gap-year-britons-boost-cv> (*The Guardian* 配信、2015年8月15日、2016年9月24日閲覧)
- 10) Lambert, C.: Fake orphanages. Bogus animal sanctuaries. And crooks growing rich on Western gullibility... why do-gooding gap year holidays may be a horrifyingly callous con. <http://www.dailymail.co.uk/femail/article-2418074/Fake-orphanages-Bogus-animal-sanctuaries-And-crooks-growing-rich-Western-gullibility--gooding-gap-year-holidays-horrifyingly-callous-con.html> (*The Daily Mail* 配信、2013年9月11日、2015年9月25日閲覧)
- 11) Purvis, K. and Kennedy, L.: Volunteer travel: experts raise concerns over unregulated industry. <https://www.theguardian.com/global-development-professionals-network/2016/jan/13/concerns-unregulated-volunteer-tourism-industry> (*The Guardian* 配信、2016年1月13日、2016年9月24日閲覧)
- 12) 前掲11)
- 13) 砂田薫「諸外国におけるギャップイヤー状況」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/57/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/02/12/1342409_04.pdf (2016年10月5日閲覧)
- 14) Rowley, T.: Goodbye 'Gap yah', hello good works. <http://www.telegraph.co.uk/education/10201359/Goodbye-Gap-yah-hello-good-works.html> (*The Telegraph* 配信、2013年7月27日、2016年9月25日閲覧) イギリスでは、ギャップイヤー期間中に若年層が行う諸活動は社会人基礎力の養成に役立つとして、その取得を奨励する動きがある。各大学は、履歴書に書けるような職業体験をすることをアドバイスしている。最も人気のあるギャップイヤー期間中の活動は、国外でのインターンシップを含む職業体験である。
- 15) PA.: Cambodia 'best value' for backpackers. <http://www.telegraph.co.uk/travel/news/Cambodia-best-value-for-backpackers/> (*The Telegraph* 配信、2013年9月23日、2016年9月25日閲覧)
- 16) イギリスの新聞は、高級紙（ブロードシート）、大衆紙（タブロイド）、および中級紙に大別される。紙面構成や使用言語の違いが明確に表れる。高級紙は、詳細に分析された様々なニュースが長めの記事で構成され、比較的難解な高級語彙が頻出する。一方で、大衆紙には扇情的なニュース、ゴシップや広告が多く、口語、俗語、卑語があふれている。中級紙は、高級紙と大衆紙の中間的な位置づけである。本稿で取り上げる各新聞のうち、*The Guardian*、*The Daily Telegraph*、*The Independent* は高級紙、*The Daily Mail* は中級紙である。
- 17) ライフショックとは、旅行中に不衛生や貧困など、自国では社会的セキュリティや施設などで隠されている人間の生活における好ましくない実態を目の当たりにすることによって、非常に強い衝撃を受けることである。Hottola, P.: Cultural Confusion: Intercultural Adaptation in Tourism. *Annals of Tourism Research*, 31 (2), 2004, pp.447-466.

- 18) 葉師寺浩之「海外孤児院ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象に関する考察」(立命館大学地理学教室編『観光の地理学』)文理閣、2015年、281-303頁。
- 19) 佐々木土師二『観光旅行の心理学』北大路書房、2007年。
- 20) 一般的な観光者の「快」の成分は、休息する、おいしい郷土料理を食べる、素晴らしい景色を見る、友達との交友関係を深める、自分探しをする、などである。「快」に対する考え方は人それぞれであり、このことは、観光者のタイプも様々であることと比例する。
- 21) Popham, G.: Voluntourism: Why students should put their gap year or summer to use before university. <http://www.independent.co.uk/student/istudents/voluntourism-why-students-should-put-their-gap-year-or-summer-to-use-before-university-10455566.html> (*The Independent* 配信、2015年8月14日、2016年9月24日閲覧)
- 22) 前掲10)
- 23) Jekin, M.: Does voluntourism do more harm than good? <https://www.theguardian.com/voluntary-sector-network/2015/may/21/western-volunteers-more-harm-than-good> (*The Guardian* 配信、2015年5月21日、2016年9月24日閲覧)
- 24) ① Bywater, M.: Brangelinas need not apply: A Cambodian orphanage is leading the march against 'voluntourism'. <http://www.independent.co.uk/news/world/asia/brangelinas-need-not-apply-a-cambodian-orphanage-is-leading-the-march-against-voluntourism-8444762.html> (*The Independent* 配信、2013年1月12日、2016年9月24日閲覧)、② Paris, N.: Expensive voluntourism trip 'the least responsible' <http://www.telegraph.co.uk/travel/news/Expensive-voluntourism-trips-the-least-responsible/> (*The Telegraph* 配信、2014年2月11日、2016年9月25日閲覧)、③ Telegraph Travel News.: Orphanage volunteering 'part of the problem' <http://www.telegraph.co.uk/travel/news/Orphanage-volunteering-part-of-the-problem/> (*The Telegraph* 配信、2013年7月30日、2016年9月25日閲覧)、④前掲10)、⑤前掲7)
- 25) 前掲24) ②
- 26) 前掲7)
- 27) Birrell, I.: The scandal of orphanages in tourist resorts and disaster zones that rent children to fleece gullible Westerners. <http://www.dailymail.co.uk/debate/article-1375330/Orphanages-Haiti-Cambodia-rent-children-fleece-gullible-Westerners.html> (*The Daily Mail* 配信、2011年4月11日、2016年9月25日閲覧)
- 28) 前掲10)
- 29) 前掲27)
- 30) Batten, R.: Voluntourism: Helping hands on holiday. <http://www.independent.co.uk/travel/holidays/voluntourism-helping-hands-on-holiday-2278368.html> (*The Independent* 配信、2011年5月4日、2016年9月24日閲覧)
- 31) 前掲7)
- 32) 前掲27)
- 33) 前掲7)
- 34) Banning-Lover, R.: Seven questions you should ask before you volunteer abroad. <https://www.theguardian.com/education/2015/jun/02/seven-questions-you-should-ask-before-you-volunteer-abroad> (*The Guardian* 配信、2015年6月2日、2016年9月24日閲覧)
- 35) 前掲30)
- 36) 前掲7)
- 37) Carmichael, R.: Cambodia's orphanages targets the wallets of well-meaning tourists. <http://www.independent.co.uk/news/world/asia/cambodias-orphanages-target-the-wallets-of-well-meaning-tourists-2252471.html> (*The Independent* 配信、2011年3月25日、2016年9月24日閲覧)
- 38) Dykins, R.: Gap years: Voluntourism – who are you helping? <http://www.telegraph.co.uk/travel/gap-year-travel/Gap-years-Voluntourism-who-are-you-helping/> (*The Telegraph* 配信、2014年8月14日、

2016年9月25日閲覧)

- 39) 前掲 24) ②
- 40) Jenkin, M.: Gap years for grown ups: older volunteers offer great opportunities for charities. <https://www.theguardian.com/voluntary-sector-network/2016/apr/13/gap-years-grown-ups-volunteers-opportunities-for-charities> (*The Guardian* 配信、2016年4月13日、2016年9月24日閲覧) カンボジアの孤児院で生活している約12,000人の子供のうち、両親ともに他界している子供は28%に過ぎない。つまり4人中3人の「孤児」は最低でも片親は生存している。ガーナでは、全国の孤児院に在籍している約5,000人の子供のうち両親ともに他界している子供はわずか10%のみである。ガーナにある孤児院148施設中140施設が、ライセンスを持たずに運営されている。この事実は、孤児院が政府や地方自治体によって監視されていないことを示している。孤児院は人身売買や小児買春等と密接な関係がある。
- 41) Oppenheim, M.: JK Rowling condemns 'voluntourism' and highlights dangers of volunteering in orphanages overseas. <http://www.independent.co.uk/news/people/jk-rowling-twitter-voluntourism-volunteering-in-orphanages-risks-a7204801.html> (*The Independent* 配信、2016年8月23日、2016年9月24日閲覧)
- 42) 前掲 38)
- 43) 前掲 27)
- 44) ① Riley, M.: Volunteers are fueling the growth of orphanages in Uganda. They need to stop. <https://www.theguardian.com/global-development-professionals-network/2016/may/16/volunteers-stop-visiting-orphanages-start-preserving-families> (*The Guardian* 配信、2016年5月16日、2016年9月24日閲覧)、②前掲 7)、③前掲 11)、④前掲 24)、⑤前掲 37)、⑥前掲 41)
- 45) 前掲 7)
- 46) 前掲 44) ①
- 47) 前掲 37)
- 48) 18歳のギャップイヤー期間中の観光者を十分なトレーニングやサポート、さらに適切な資格無しで教育・医療分野、建設現場や孤児院でボランティアをさせることはリスクが大きい。実際、タンザニアのボランティアツーリズムでは、医学的知識を持っていないボランティアが病院で医療行為を行うように求められることがあり、これは患者にとって非常にリスクが大きいのは明らかである(前掲 11))。
- 49) 前掲 21)
- 50) Purvis, K. and Kennedy, L.: Gap year volunteering: how to do it right. <https://www.theguardian.com/global-development-professionals-network/2015/aug/13/gap-year-volunteering-how-to-do-it-right> (*The Guardian* 配信、2015年8月13日、2016年9月24日閲覧)
- 51) ①前掲 10)、②前掲 27)
- 52) 前掲 21)
- 53) ① The Telegraph Travel.: Volunteer holidays 'do more harm than good'. <http://www.telegraph.co.uk/travel/hubs/gapyear/8107555/Volunteer-holidays-do-more-harm-than-good.html> (*The Daily Telegraph* 配信、2010年11月3日、2016年9月25日閲覧)、②前掲 7)、③前掲 8)、④前掲 23)、⑤前掲 41)
- 54) Utton, C.: Want an earnest answer to 'voluntourism'? The International Citizen Service may be for you. <http://www.independent.co.uk/student/student-life/want-an-earnest-answer-to-voluntourism-the-international-citizen-service-may-be-for-you-9031564.html> (*The Independent* 配信、2013年12月31日、2016年9月24日閲覧)
- 55) Kweifio-Okai, C.: Student Speak: Can volunteer holidays be a force for good? <https://www.theguardian.com/global-development/2015/apr/09/students-speak-can-volunteer-holidays-be-a-force-for-good> (*The Guardian* 配信、2015年4月9日、2016年9月24日閲覧)
- 56) 例えば、学校建設や井戸掘りなどの建設系のボランティアでは、昼間にボランティアツアーリストが行った作業が不十分であるため、現地の労働者が夜中に作り直すことが多くある(前掲 8))。
- 57) 前掲 53) ①
- 58) 前掲 7)

- 59) 前掲 7)
- 60) 前掲 53) ①
- 61) 前掲 10)
- 62) 前掲 7)

(奈良県立大学地域創造学部講師)

Contradictions and Criticisms of Orphanage Volunteer Tourism: An Exploration through British Newspaper Articles

by
Hiroyuki Yakushiji

This article aims to explore the nature of the contradictions and criticisms of orphanage volunteer tourism in less developed countries. The nature of these contradictions and criticisms was explored through the content of British newspaper articles. While volunteer tourism has been recognised as a form of ‘alternative tourism’, and can be seen as an alternative to mass tourism, recent studies have revealed that volunteer tourism can have many negative impacts on aid recipients and can in fact ‘do more harm than good’. This article has identified the following contradictions and criticisms of orphanage volunteer tourism.

First, the concept of orphanage volunteer tourism is contradictory. While the nature of volunteering contains altruism and gratuitous service, volunteer tourism has been established as a tourism business that the agencies and orphanage owners can use to maximise their profits. Moreover, volunteer tourists tend to be motivated to find themselves (self-discovery) and feel good through engaging in volunteer activity. This is ultimately a selfish and egoistic motivation rather than altruistic.

Second, some volunteer agencies and orphanage owners have pursued profit rather than alleviating the children’s vulnerability. They target the wallets of the volunteer tourists. This irresponsible conduct poses a threat to orphanages because it can foster threats from paedophiles and human traffickers, and can cause distorted growth—both physically and mentally.

In summary, orphanage volunteer tourism, which rich Western tourists visit an orphanage where vulnerable children live, cannot meet the original concept of volunteering. Orphanage volunteer tourism may instead be merely a ‘role-playing’ activity for the tourists, and a cash-cow for the agencies and orphanage owners.